

世紀転換期アイルランドにおけるエリート層のスポーツライフ

アイルランドラグビーの父

C. B. バリントン(1848-1943) に
着目して

榎本雅之

Masayuki Enomoto

滋賀大学 経済学部 / 准教授

19世紀のアイルランドは、16世紀以降に入植・定着した少数のプロテスタントが地主層を形成し、圧倒的多数のカソリックに対し、政治、経済、宗教など様々な領域にわたって優越した地位を築いていた。近世を通じて、プロテスタントはカソリックに対して、きわめて植民地的な社会構造を作り上げていた。1800年の連合法(Act of Union)以降、両王国議会の合同により、立法上・司法上は連合王国の一角を占めることになったが、行政的にはロンドン政府が任命する、総督の統治権に服し続けた。このように二重の植民地的性格が連合王国のもとで継続したがゆえに、アイルランド側から、とりわけ法的・制度的かつ文化的に差別を受け続けるカソリック被支配層から、こうした状況を打破しようという動きが絶えず生じた¹⁾。19世紀初期には、ダニエル・オコンネル(Daniel O'Connell)がカソリック協会を組織し、あらゆる階層の教徒を巻き込み、1829年にカソリック解放法を成立させた²⁾。ほかにも、自治、独立を勝ち取るために、1848年の青年アイルランド党の蜂起、60年代のIRB (Irish Republic Brotherhood) の運動がある³⁾。

文化面でも連合王国への同化に抵抗する動きがみられる。1890年代にはウィリアム・バトラー・イエイツ(William Butler Yeats)を中心に、アングロ・アイリッシュ文芸復興を開始、この活動はアイルランド語の復活を目指すゲーリック・リーグ(1893年設立)へと展開していく⁴⁾。スポーツの場面では、1884年にGAA(ゲーリック・アスレティッ

1) 山本正「世紀転換期のアイルランド問題」木村和男編『世紀転換期のイギリス帝国』ミネルヴァ書房、2004、p. 83, 84

2) J. H. ホワイト「ダニエル・オコンネルの時代(1800-1847)」T. W. ムーディ / F. X. マーチン編著、堀越智監訳『アイルランドの風土と歴史』論創社、1982、pp. 276-295

3) T. W. ムーディ「フィニアン、自治、土地戦争(1850-1891)」T. W. ムーディ / F. X. マーチン編著、堀越智監訳『アイルランドの風土と歴史』論創社、1982、pp.307-327

ク協会)が設立され、イングランドのスポーツを禁止し、ハーリングやゲーリック・フットボールのような、かつてアイルランドで行われていたスポーツの復活を目指した。最初のパトロンであるクローク大司教 (Archbishop Croke, Thomas William) は、「ローンテニス、ポロ、クロッカー、クリケットなどのような外国で生まれた素晴らしいフィールドスポーツはそれなりに優秀ではあり、健康的なスポーツではあるが、この地の独特さはなく、やはり外国のものだ」⁵⁾と指摘し、当時のアイルランドでブリテン島生まれのスポーツが普及しつつあることを悲観している。

19世紀に入ると様々なブリテン島生まれのスポーツがアイルランドで行われている。例えば、カウンティ・キルデアのクロングウズ・ウッドカレッジ (Clongowes Wood College) では、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) やナショナリストのリーダー、ジョン・レドモンド (John Redmond) がクリケットをプレーしていた⁶⁾。アイルランド自治のために活動したカウンティ・ウィックローウの地主、チャールズ・スチュアート・パーネル (Charles Steward Parnell) は少年時代やケンブリッジ在学中、クリケットをプレーした⁷⁾。このようにアイルランドの著名な人物たちが、イングランドの代表的な近代スポーツ、クリケットをプレーしている。また、高等教育機関であるダブリン大学トリニティ・カレッジ (Trinity College, Dublin、以下 TCD) では、クリケットをはじめ、フットボールやアスレティクス、漕艇などイングランド産のスポーツのクラブが組織され、卒業生はアイルランド各地にこれらのスポーツを広めた。他にも、連合王国の駐屯地や大

都市など、ブリテン島の人々のコミュニティがあるところで、クラブが結成される。

近代スポーツのアイルランドへの伝播、普及過程について、ラグビーやクリケットなど、各種目の先行研究で詳細に叙述されている。これらは近代スポーツを象徴する統括組織に焦点を当てた、いわゆる協会史あるいはクラブ史が中心となっている。本研究では、これら先行研究を参考にしながら、一人の人物に着目し、これまでの組織や種目中心の歴史叙述とは異なる視点で、アイルランドスポーツ史を検討する。そのために、アイルランドラグビーの父と称される⁸⁾ チャールズ・バートン・バリントン (Charles Burton Barrington : 1848-1943) のスポーツライフを明らかにする。バリントンはラグビー校で学び、TCDでフットボールクラブのキャプテンを務めた人物である。卒業後、故郷のリムリック (Limerick) に戻り、世紀転換期アイルランドのスポーツシーンで活躍した。バリントンのスポーツライフから、アイルランドのエリート層がスポーツの場面で果たした役割を検討し、近代スポーツがアイルランドに伝播、普及していく過程について新たな知見を加えたい。

本研究ではまず、アイルランドのエリート層が通う高等教育機関TCDのスポーツ活動を概観する。そして、TCD時代のバリントンのスポーツ活動をフットボールクラブの150年史等から明らかにし、フットボールの近代化において、バリントンが果たした役割を明らかにする。最後に、TCD卒業後のバリントンのスポーツ活動をアイリッシュ・ニューズペーパー・アーカイブズ⁹⁾に所蔵されている全国紙アイリッシュ・エグザミネー (*the Irish Examin-*

4) ドナル・マッカーートニー「パーネルからピアースへ (1891-1921)」T. W. ムーディ / F. X. マーチン編著、堀越智監訳『アイルランドの風土と歴史』論創社、1982、pp. 328-333

5) *The Gaelic Athletic Association for the Preservation and Cultivation of National Pastimes* (Second Edition), Dublin, 1887: GAAのルールブック

6) SIGGINS, Gerard, *Green Days: Cricket in Ireland 1792-2005*, Dublin: Nonsuch, 2005, p. 15

7) Ibid., p. 17

8) WEST, Trevor, *The Bold Collegians -The Development of Sport in Trinity College, Dublin-*, Lilliput Press, 1991, p. 25

9) <http://www.irishnewsarchive.com/>

er) やフリーマーズ・ジャーナル (*the Freeman's Journal*)、地方紙リムリック・リーダー (*the Limerick Leader*) を用いて明らかにし、世紀転換期アイルランドにおけるエリート層のスポーツライフについて検討する。

II TCDのスポーツ

TCDはダブリン大学の唯一のカレッジとして、1592年、エリザベス一世により設立された。設立当初はカソリックの学生の入学が認められなかったため、人口の大部分をしめるカソリック教徒の人々は通うことができなかった。1793年にカソリック教徒の入学が許可されたが、およそ50年が経過した1850年になっても、カソリック教徒の在学者はわずか10分の1だった。大学には、ナショナリストとは異なる急進的な学生もいたが、連合法制定以降、基本的にはユニオニズムの砦だった¹⁰⁾。

1684年にボウルズをプレーするためのボウリング・グリーン、1694年にファイブズのコート、1741年にフランス式のテニスコートが設置されており¹¹⁾、スポーツ活動に関して直接的な言及はないものの、これらのスポーツが行われていたと考えることができる。19世紀の初期には、南の二つのフィールドがカレッジパークとして使われた。ここでは、クリケット、ハーリング、フットボールや様々なタイプのアスレティック競技が非公式に行われた。19世紀中頃になると、アイルランド出身で、イングランドのパブリックスクールで学ぶ学生が増えていた。1855年の時点で、少なくとも1,000人の

アイルランド人の少年がブリテン島に渡っている。この留学生が、パブリックスクール卒業後TCDに入学し、イングランド式のゲームを持ち込んだ¹²⁾。イングランド式のゲームはTCDに浸透し、19世紀末、近代スポーツがアイルランド各地に普及する起点となる。それでは当時、具体的にどのような近代スポーツが行われていたのか。

ダブリン大学セントラル・アスレティッククラブ (Dublin University Central Athletic Club) の前身であるダブリン大学フットボールクラブ・競走委員会 (Dublin University Football Club Foot Races Committee) は1857年に結成された。大学の様々なクラブの代表者によって構成されたこの組織は、1872年に大学アスレティッククラブ (University Athletic Club)、1882年に大学アスレティック連盟 (University Athletic Union) となり、学生、教職員、卒業生との関わりなど、統括団体として大学のクラブをコントロールした¹³⁾。この組織によって、TCDのアスレティック大会が運営される。1857年に始まったこの大会は、カレッジ・レース (College Races) として、毎年開催される。何種類もの競走に加えて、フットボールのドロップキック、クリケットボール投げ、シガーレース (シガーに火をつけて競走することか?) なども行われた。会場には大きなテントやシートが準備され、クラブはアスリートや多くの観衆 (多い時には20,000人) をコントロールした。しかし、大会は参加チケットの割り振りやレースのハンディキャップの設定、結果の連絡、観衆をトラックの中に入らせないことなど、何らかの問題が発生していた。財政

10) WEST, 1991, op. cit., p. 8

11) Ibid., pp. 5-7

12) Ibid., pp. 9-12

13) Ibid., p. 1, 2

14) Ibid., p. 37, 38

15) *Handbook of Cricket in Ireland, 1865/66*, Dublin, 1866

16) トレイル (1 November 1838 – 15 October 1914) はカウンティ・アントリム (Co. Antrim) 出身。1860年にTCDを卒業、1865年にフェローとなり、1904-1914年の間、学長を務めた。スポーツ活動として、トレイルはクリケットとフットボールクラブでキャプテンを務め、登山の愛好家だった。ラケットのチャンピオンに14回なっている。: WEST, 1991, op. cit., p. 14

17) マハフィ (26 February 1839 – 30 April 1919) はスイス生まれで幼少期をドイツで過ごした。1859年にTCDを卒業、1864年にフェローとなり、1914-1919年学長を務めている。ス

的には、大会はスタートから大きな成功を得た。毎回400ポンドを上回る収入を得、体育館(1869年)や観覧席(1884年)などの建設資金となった¹⁴⁾。

クリケットは19世紀の初頭からTCDで行われていた。1866年に出版されたローレンス(Lawrence)の「アイルランドのクリケットのハンドブック」¹⁵⁾によると、大学のクリケットクラブは1835年に設立されている。1842年、大学の理事会は、クリケットのためのピッチとして、カレッジパークを建設する。19世紀の半ばになると、駐屯地や貴族の土地の近隣にクリケットクラブが結成された。この頃、TCDは、1837年に設立されたフェニックス・クリケットクラブ(Phoenix Cricket Club)、1845年に設立されたレンスター・クリケットクラブ(Leinster Cricket Club)とともにアイルランドを代表する強豪として、ビッグ3と呼ばれた。大学のクリケットクラブには、のちに学長となるアンソニー・トレイル(Anthony Traill)¹⁶⁾やジョン・ペントランド・マハフィ(John Pentland Mahaffy)¹⁷⁾らフェローも参加し、大学内のスポーツの振興に熱意を持って取り組んだ¹⁸⁾。

学生たちは漕艇にも熱中した。大学のクラブは、卒業生や学生が参加していたペンブローッククラブ(Pembroke Club: 1836年に結成)から、在学生たちが独立する形で、1843年、大学漕艇クラブ(University Rowing Club)として結成された。1867年には、純粋な大学生だけのクラブであることと、カソリック教徒へのメンバーシップに反対した大学漕艇クラブの学生たちが退部し、新たにダブリン大学ボートクラブ(Dublin University

Boat Club)を結成する。彼らは、アイルランドのレガッタのルールを統一する際、主要な役割を担った。また、1883年、「連合王国の漕艇クラブに認められるようなアマチュアのアーズマンシップの基準を維持するため」、「アイルランド人でないクルーと対戦するクルーを結成する目的(インターナショナルの試合)で、アイルランドのアマチュア漕艇クラブのメンバーを組織するため」、「全アイルランドレガッタを行うための一般規約の作成のため」、以上3点を目的として、アイルランド漕艇連盟の結成を提案した¹⁹⁾。

フットボールクラブは、イングランドのパブリックスクールであるラグビー校やチェルテナム校の卒業生たちによって結成された。1856年以前にクラブに入部した36人のメンバーの内訳は、16人がチェルテナム、10人がラグビー、9人がアイルランドの学校、1人が家庭教師による教育を受けていた。クラブで行われていたフットボールは、ラグビー式、アソシエーション式、ゲーリックなど定まった形式はなく、試合ごとで異なるフットボールをプレーしていた²⁰⁾。1860年代になると、TCDの卒業生によって学外に新たなクラブが設立され、対外試合が行われるようになる。その最も代表的なクラブはワンダラーズ(Wanderers)で、クラブに所属するほとんどの選手はTCDの出身者だった²¹⁾。1868年、クラブでフットボールの統一ルールが制定され、卒業生らによって各地にもたらされた。1873年、フットボールクラブは、イングランドに遠征を行い、リヴァプールのディングルクラブ(Dingle Club)とラグビーユニオンのルールで試合を行っ

スポーツ活動として、マハフィはトレイルよりもクリケット選手として優れており、1871年に南イングランド選抜と翌年に全イングランド選抜との試合に投手としてプレーしている。WEST, 1991, op. cit., p. 14, 15

18) WEST, 1991, op. cit., p. 13, 14

19) Ibid., pp. 18-20

20) WEST, Trevor, *Dublin University Football Club, 1854-2004: 150 Years of Trinity Rugby*, Wordwell, 2003,

p. 13

21) GARNHAM, Neal, *Origins and Development of Football in Ireland: Reprint of R M Peter's Football Annual of 1880*, Ulster Historical Foundation, 1999, p. 3: 現在のワンダラーズ(1869年設立: TCDとの関連は少なからず見られるか²⁾)とは異なるTCDの卒業生によって結成されたクラブである: ESBECK, Edmund Van, *The Story of Irish Rugby*, Hutchinson, 1986, p. 13

た。その翌年、イングランドのラグビーユニオンから、国際試合の開催に関する打診があり、そのために統括組織IFU (Irish Football Union) 設立を決意した。設立会議に参加したのは、TCDクラブからの代表者のほか、ワンダラーズやランズダウン (Lansdowne) クラブからの代表者も参加した。参加クラブの代表者の多くは、TCDの卒業生だった²²⁾。

アスレティック競技、クリケット、ボート、フットボールの他にも、1878年には自転車クラブが設立される。クラブの卒業生は、アイルランドのサイクリングの統括組織となるアイルランド・サイクリング協会 (Irish Cycling Association) 設立に主要な役割を果たす。ローンテニスクラブ (Lawn Tennis Club) は1877年に設立、ゴルフクラブは1894年に設立されている²³⁾。

1882年2月に開催されたアスレティック連盟 (Athletic Union) の設立会議では、大学のスポーツクラブのカラーを黒地に金のシャムロックとすること、連盟の構成クラブをボートクラブ、漕艇クラブ、クリケットクラブ、フットボールクラブ、体操とローンテニスクラブ (二つのクラブは連合している)、自転車クラブ、ラケットクラブ、ハーレークラブとし、クラブのメンバーを卒業生または在學生とすること、連盟の委員会を委員長と副委員長 (大学の議会の代表者を含んだカレッジのシニアメンバーから選ばれる)、幹事、会計と二人の委員を年次総会で選出し、加えて、ボート、漕艇、クリケット、フットボールから各2名、自転車、体操とローンテ

ニス、ラケット、ハーレーから各1名の計12名の委員によって構成することなどが定められた²⁴⁾。

以上のように19世紀を通じて、イングランドの近代スポーツが、留学などを経験した学生たちからTCDに持ち込まれ、クラブが組織された。また、TCDに接するグラフトンストリートにあったローレンスのクリケット用具店には、1860年代の時点で、クロッカーやポロ、バドミントンなどのスポーツ用具が販売されており、当時、様々な近代スポーツがTCDで行われていた可能性を示唆している²⁵⁾。これらスポーツはTCDの卒業生を通じて、各地に伝えられ、普及していく。このようにTCDは、アイルランドにおける近代スポーツ拡大の起点となった。

III チャールズ・バートン・バリントンについて

バリントンはカウンティ・リムリックのグレンスタール (Glenstal) に屋敷を持つ、著名なアングロ・アイリッシュの家系²⁶⁾だった。バリントン一族は、1829年、リムリック市にバリントン病院を設立したほか、バリントン埠頭²⁷⁾やバリントン橋を建設している。1840年代の大飢饉の際、彼の祖父マテュー・バリントン (Matthew Barrington) は地代を免除している。このようにバリントン家は、代々篤志家として地元地域に貢献していた。1870年代、バリントン家は9,485エーカーの土地を保有するようになっていた。

22) WEST, 1991, op. cit., p. 31

23) Ibid., pp. 46-50

24) Ibid., p. 50

25) 榎本雅之「スポーツカタログにみるアイルランドの近代スポーツ-*Handbook of Cricket in Ireland*, 1865/66-80/81を手がかりに-」楠戸一彦先生退職記念論集『体育・スポーツ史の世界-大地と人と歴史との対話-』2012年, pp. 37-56

26) 家系図については、イギリス貴族の家系図にバリントン家の詳細な家系図が明らかにされている。(http://www.thepeerage.com/p13408.htm)

27) 現存するが、ボートの入渠として使用されていない。

28) *Rugby School Register Vol. 2, from 1850 to 1874*, 1886: バリントンの叔父のチャールズ・ウエスト (Charles West) は、フットボール選手で、大学のゲームに何らかの影響を与えた



図1 カウンティ・リムリック、グレンスタールのバリントンの邸宅
(NUI Galwayの不動産のデータベース: <http://landedestate.s.nuigalway.ie>)

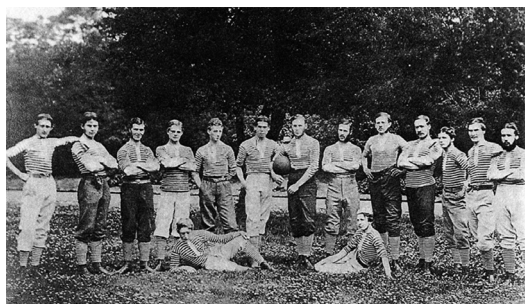


図2 アイルランドで現存する公式フットボールクラブの最も古い写真 (1867) ; ボールを持っているのがバリントン (Neal Garnham, *Origins and Development of Football in Ireland: Reprint of R M Peter's Football Annual of 1880*, Ulster Historical Foundation, 1999, p.4)

本稿で取り上げるチャールズ・バートン・バリントンは、4代目クロカー・バリントン (Croker Barrington) とアナ・フェリシア・ウエスト (Anna Felicia West) の長男として、1848年に誕生する。バリントンはダブリン郊外のラスファーンナム (Rathfarnham) にある聖コロンバ・カレッジ (St. Columba's College) を卒業後、イングランドのラグビー校で学ぶ(1864年2月に入学、1866年卒業)²⁸⁾。そして、1867年1月にTCDに入学、1867-68、1868-69、1869-70のシーズンでフットボールクラブの第4代目のキャプテンを務め、アイルランドでのフットボールの近代化に非常に大きな役割を果たした²⁹⁾。1872年、修士号を取得し、TCDを卒業した。そして、故郷に戻り、1879年にカウンティ・リムリックの州長官に就任する。1890年7月4日、彼の父が亡くなった後、準男爵の爵位を継承した。また、リムリック市英国縦隊予備砲兵科南部門の名誉大佐の任に就き、1919年には大英帝国勲章

を受けている。他にも、カウンティ・リムリックの州副総監や治安判事を歴任した。

バリントンは1895年2月14日にメアリー・ローズ・ベーコン (Mary Rose Bacon: 1868-1943) と結婚し、ウィンフレッド (Winifred Frances Barrington: 1897-1921)、6代目となるチャールズ・ベーコン (Charles Bacon Barrington: 1902-1980)、7代目となるアレクサンダー (Alexander Fitzwilliam Croker Barrington: 1909-2003) の3人の子をもうけた³⁰⁾。1911年のセンサスには、彼がアイルランド国教会の信者であったこと、妻や子はイングランド国教会の信者であること、アイルランド語を話せないこと、読み書きができることのほか、職業、当時雇っていた数名の召使の氏名、年齢、信仰などが記されている³¹⁾。

バリントンは、老年期も非常に活発で、第一次世界大戦中、67歳である彼は救急車を運転し、救急隊として活躍した。彼は生涯を通じて、TCDの

可能性がある。バリントンは、「チャールズ・ウエストはラグビー校を舞台にした『トム・ブラウンの学校生活』の「イースト」であると語っている。ウエストは、1844年にTCDに入学、1849年に卒業している。(WEST, Trevor, 'Charles Burton Barrington and Trinity Football Club', *The Old Limerick Journal*, vol. 30, Limerick City Council, 1993, p. 32)

29) Watson, *the College Pen*, Dublin University, 1930, Dec. 17th, p.2.: WEST, 1991, op. cit., p. 4 : WEST, 1993, op. cit., p.32

30) イギリス貴族の家系図(<http://www.thepeerage.com/p12854.htm>)。

31) 1911年のセンサス (<http://www.census.nationalarchives.ie/reels/nai002766970/>)

フットボールクラブに関心を持っており、クラブのキャプテンに、重要な勝利のたび、定期的に祝電を送っていた。

彼の一人娘ウィンフレッドは、1921年に共和主義者に襲われ、悲劇的な死を遂げている。そして、その悲しみから逃れるため、バリントン一家はイングランドに引っ越した。その際、アイルランド自由国政府に、大統領邸として地所を提供することを申し出た。しかし、この申し出は受け入れられなかった。邸宅は現在、ベネディクト会の小修道院に付随する学校となり、強いラグビーの伝統を維持している³²⁾。

1943年8月16日、リムリック・リーダーに掲載されたバリントンの訃報記事は、彼がグレンスタールに住んでいたことやバリントン病院の事務長などを務めたという情報のほか、非常にいい地主であったことやTCDで優れた漕艇の選手だったこと、アイルランドにラグビーを紹介したこと、リムリック・アマチュア・アスレティック自転車クラブ(Limerick Amateur, Athletic and Bicycle Club、以下、LAABC)の初代会長だったことなどが紹介されている³³⁾。

IV TCDでのバリントン フットボールの近代化

バリントンがアイルランドラグビーの父と称されるのは、自身の出身校であったラグビー校のフットボールを基に、オリジナルのルールを作成し、TCDのフットボールクラブで採用したことにある。バリントンは入学した当時のTCDの学生生活について、「そこは自転車に乗ることも、ゴルフをする

ことも、ホッケーをすることも、何もない、ただ、カードゲームやビリヤード、ウイスキーを飲む、気取った生活だった。特別にルールの決まりや道具もないフットボールが少し行われた」³⁴⁾と回想している。1865-66年、クラブの幹事長をしていたウォール(R. M. Wall)は、「クラブには、ルールが全くなかった。ゲームには、タッチラインもゴールラインもなく、ただラグビーのゴールポストを目指して、ボールを持って走るだけだった。ラグビー校の出身者は新たなルールの概念を持ち込んだが、彼らでさえ、成文化されたルールを持っているわけではなかった」³⁵⁾と述べている。

バリントンとウォールは、1867-68年にラグビー校のルールを基にフットボールのルールを成文化する。そして、1868年10月、作成したルールを統一ルールとすることをフットボールクラブの年次総会で提案した。これは、ボールをキャッチし「コール・ア・マーク(call a mark)」と叫んでプレーを中断する；オフサイド規則の導入；グラウンドからボールを拾いあげることはできないが、ボールを持って走ることを許可する；得点はボールをキックし、クロスバーを越え2本のゴールポストの間を通過したとき認める；相手のスネを蹴る「ハッキング(hacking)」や相手を捕まえる「ホールディング(holding)」、相手の首を絞める「スロットリング(throttling)」は認めないが、相手の足をひっかけてつまずかせる「トリッピング(tripping)」は認めるといったルールだった³⁶⁾。このルールは、1845年のラグビー校のフットボールのルールのうち25項目を採用していた³⁷⁾。ラグビー校との最大の相違点はハッキングを認めないことだった³⁸⁾。ルールの序文には、「我々は将来にわたって、ゲームの

32) WEST, op. cit., 1991, p. 4, WEST, 1993, op. cit., p. 32

33) *the Limerick Leader*, 1943年8月16日

34) Letter from C. B. Barrington, 6 October 1920, TCD Ms. 2639.

35) WEST, 2003, op. cit., p.15; 実際にはラグビー校は1846年にルールを成文化している。また、1862年に設立されたブラックヒースフットボールクラブもラグビーのルールを成文化している。ラグビー校出身者のバリントンは、成文化されたルールの存在を知らなかった可能性があり、ラグビー校で伝統的に行われているフットボールを思い出しながら、TCDのフットボールのルールを作成した。

CENSUS OF IRELAND, 1911.
Two Examples of the mode of filling up this Table are given on the other side.

FORM A.
No. on Form B. 12

RETURN of the MEMBERS of this FAMILY and their VISITORS, BOARDERS, SERVANTS, &c., who slept or abode in this House on the night of SUNDAY, the 2nd of APRIL, 1911.

NAME AND SURNAMES.	RELATION to Head of Family.	RELIGIOUS PROFESSION.	EDUCATION.	AGE (last Birthday) and SEX.	RANK, PROFESSION, OR OCCUPATION.	PARTICULARS AS TO MARRIAGE.		WHERE BORN.	IRISH LANGUAGE.	If Blind and Deaf, dumb only, or Idiots or Imbeciles, or Lunatics.
						State for each Married Woman entered on this Table the number of—	Children born alive to her.			
Christian Name.	Surname.			Age of Males.	Age of Females.		Whether "Married," "Single," "Widow," or "Divorced."	Children born alive to her.		
1. Charles Barton	Barrington	Head	Both	63		Baronet	Married	16	3	Dublin
2. Mary Anne	Barrington	Wife	Both	42			Married	16		Dublin
3. Charles Barton	Barrington	Son	Both	8			Single			Dublin
4. Elizabeth Anne Barrington	Barrington	Daughter	Both	13		Scholar	Single			Dublin
5. Thomas Barton	Barrington	Son	Both	1		Infant	Single			Dublin
6. Thomas Anne Barrington	Barrington	Daughter	Both	37		Spinster	Single			Dublin

I hereby certify, as required by the Act 18 Edw. VII., and 1 Geo. V., cap. 11, that the foregoing Return is correct, according to the best of my knowledge and belief.

I believe the foregoing to be a true Return.

John W. Barrington, Signature of Enumerator.

図3 1911年のセンサス、チャールズ・バートン・バリントンの項目（アイルランド国立アーカイブズ: <http://www.census.nationalarchives.ie/reels/nai002766970/>）

方法に精通している選手を保護することができる」³⁹⁾と述べられており、フットボールを荒々しいゲームとして捉えるのではなく、安全性に気を配ったルールを作成した。

バリントンは、ラグビー校のルールをベースにしていたが、ラグビー校が重要な方法と考えていたハッキングを禁止した（TCDフットボール規則第15項）。ハッキングについてバリントンは、「当時、スクラムで頭をさげることは認められず、もし、頭を下げたら、他の選手が頭を下げた選手の頭をすぐに上げていた。フォワードの選手はまっすぐ立って相手側の選手をハッキングして蹴散らした。選手は、密集した状態で、重いブーツをはき、まっすぐ立っていた。たった一回のキックで頭がぐらぐらに

なり」、自身の腓骨が「ノコギリの刃のようになった」と述べている⁴⁰⁾。1861年、イングランドでFA（Football Association）が設立される際、ラグビー支持者は、ハッキングを禁止することに反対し、認められなかったことが、FAに加わらなかった理由の一つとなっている。したがって、バリントンらがハッキングを禁止したことは、ラグビー式のフットボールの重要な要素を削ぎ落とした非常に大きな決定であり、そのプレーの危険性を鑑みたプレイヤーズ・ファーストのルール制定だったといえる⁴¹⁾。

バリントンは、ルールの成文化以外にも、ラグビー校でプレーされていたように、フォワードとバックスを導入するなど、TCDのフットボールをラグ

36) GARNHAM, op. cit., p.4; ガーナムはTCDのルールはブラックヒースフットボールクラブが1863年に作成したルールに非常によく似ていると指摘している。

37) ラグビー校からTCDへクラブ設立150周年記念の挨拶状; WEST, 2003, op. cit., p. 3

38) Ibid., p.17

39) JOHNSTON, Karl, 'The Sporting Barringtons', *The Old Limerick Journal*, 1988, p. 89

40) WEST, 2003, op. cit., p.17, 18

41) 榎本雅之「アイルランドにおけるラグビーのはじまり」藤井雅人ら編『体育・スポーツ・武術の歴史にみる「中央」と「周縁」』道知書院、2015、p. 136

ビー式の形に作り変えた。そして、ここでプレーした選手たちが卒業後、アイルランド各地でTCD式のフットボールを行う⁴²⁾。1871年、イングランドでラグビーの統括組織RFU (Rugby Football Union) が設立され、アイルランドでも国際試合を行うことを目的として、IFUが1875年2月15日に設立される。これにより、形式的にはイングランド式のラグビーフットボールのルールが公式ルールとなる。しかし、それまではTCD式のフットボールがアイルランドに浸透していく。アイルランドにおいて非常に影響力のあるTCDがこのルールを提案したことで、ラグビーがアイルランドに浸透する一因となった。

フットボールのルールの制定において非常に重要な役割を担ったバリントンだったが、ラグビーのアイルランド代表としてプレーすることはなかった。そして彼のスポーツ活動の中心はフットボールから漕艇へと変わる。1870年、バリントンは、TCDのクルーとして、イングランドで開催されるヘンリー・ロイヤル・レガッタ(以下、ヘンリー)に参加する。TCDのチームはヘンリーへの初めての挑戦だった。ボートを現地で借り、たった9人ではほとんど全ての種目にエントリーした。試合に臨む環境は整えられていなかったにも関わらず、彼らはヴィジターズカップで、5連覇を達成しようとしていたオックスフォード大学に勝利し、優勝する。翌年も、より大きな目標を持って挑んだが、ヴィジターズカップではケンブリッジ大学に敗れ、決勝に残ったレディーズカップにも敗れた⁴³⁾。バリントンはこのヘンリーでの経験をもとに、アイルランドで行われていなかったエイトをスタートさせたとされている⁴⁴⁾。

る⁴⁴⁾。彼は1872年にTCDを卒業した後も、ボートクラブのクルーの一員として大会に参加するが、詳細は後述する。

他にバリントンの名は、アスレティック大会を開催することや、学内のスポーツクラブを統括する役割を担うアスレティッククラブの議事録に現れる。入学してから約1年が経過した1868年2月27日、執行部の委員に選出された。翌年は選出されていないが、1870年に再び選出されている⁴⁵⁾。

バリントンは、TCDのフットボールクラブで、ラグビー校式のフットボールのルールを導入した。彼はアイルランドで競技や組織のイングランド化、つまり、近代化をもたらした。ほかにも、ダブリン大学セントラル・アスレティッククラブの委員として、アスレティック大会の運営等に携わった。また、漕艇選手として、アイルランドで初めて、ヘンリーに出場しており、ここでの経験からエイトの種目をアイルランドに持ち帰った。このように彼はイングランドのスポーツをアイルランドに持ち込み、統一ルールの成文化や新たな種目の導入を行うなど、近代スポーツの伝道者だった。また、フットボールやアスレティッククラブの執行部として働くことで、スポーツ団体の運営を学ぶとともに様々な人とコネクションを築いたことが推測できる。

V TCD卒業後のバリントンのスポーツ活動

1872年もTCDクラブはヘンリーに出場する。この時は、ロンドンのクラブがボートにスライドシートを導入し、それが大きなアドバンテージに

42) JOHNSTON, op. cit., p. 90

43) BLAKE, Raymond., *In Black & White, -A History of Rowing at Trinity College Dublin-*, Dublin University Press, 1991, p. 30

44) JOHNSTON, op. cit., p. 93

45) ダブリン大学セントラル・アスレティッククラブの議事録:TCD Ms. 2255

46) BLAKE, op. cit., p. 31.

47) クローカー・バリントン(1851-1926)は優勝した当時23歳で、身長は5フィート10インチ、体重は170ポンドだった。彼は1874年にTCDを卒業している。(JOHNSTON, op. cit., p. 91.)

48) JOHNSTON, op. cit., p. 91: 他のメンバーにブラム・ストーカー (Bram Stoker: 後のHenry Irvingの秘書で、ドラキュラの創作者) がいる。(WEST, op. cit., 1991, p. 30)

なっていた。TCDはこれまでで最高のメンバーで挑んだが、オックスフォードのペンブローック・カレッジ (Pembroke College) に敗れた⁴⁶⁾。1870年のヘンリーのヴィジターズカップに優勝したバリントンは、TCD卒業後もクラブのメンバーとして、1873年、1874年のヴィジターズカップで優勝する。この大会には、弟のクローカー・バリントン (Croker Barrington)⁴⁷⁾ もストロークとして参加している。また、1876年、イングランドのマーロー (Marlowe) で開催されたグランド・チャレンジカップのフォアとエイトに出場する⁴⁸⁾。バリントン家の二人は、世紀転換期にリムリック・ボートクラブのメンバーだった。現在、クラブが誇る所有物の一つが、1896年6月に、チャールズ・バリントンによって寄贈されたオールである。チャールズはオアーズマンとしての才能を発揮していた。

1876年、バリントンはフィラデルフィアでのインターナショナル漕艇大会に、アイルランドとTCDの代表クルーのキャプテンとして参加した。同行者には、チャールズの二人の弟クローカーとウィリアム (William Barrington) がおり、クローカーはストロークとして、ウィリアムは補欠として参加した⁴⁹⁾。クルーは8月6日の出発まで、バリントンの邸宅に二週間滞在し、マルケア川 (the Mulcair River) でトレーニングを行った。一行は、8月15日にニューヨークに到着し、翌日にはフィラデルフィアに列車で移動、18日から29日の間、一日に二回、スクールキル川 (the Schuylkill River) でトレーニングを行い、大会を待った。出場したフォアでは、スタートに失敗し、追いつけたものの2位で終了した。大会後、ワシントンDCのアナロスタン・ボー

トクラブ (Analoostan B. C.) に招待され、ポトマック川 (the Potomac River) で対戦した。その後、ナイアガラの滝やトロント、モントリオール、ケベック、シャンプレーン湖 (Lake Champlain) やジョージ湖 (Lake George) を訪れ、ニューヨークに戻り、9月27日にアイルランドに向けて出発、10月6日にクイーンズタウン (現在のコブ) に到着した⁵⁰⁾。

バリントンは、20世紀の変わり目まで、リムリック・ボートクラブ (1870年設立) のメンバーで、パトロンも務めた。彼は、娘のウィンフレッドを亡くした後、イングランドへ移住する。そこでボートを楽しむ記録⁵¹⁾があり、70歳を過ぎてもなおスポーツに親しんでいる。

漕艇で活躍していたバリントンは、故郷リムリックで、フットボールクラブ設立にも携わっている。1876年、彼はTCDのフットボールクラブのメンバーだったクロニン (J. G. Cronyn) とともにリムリックFCを結成する。リムリックFCは、TCDとの深い関係に助けられ、設立からすぐに主要なクラブとなる。数ヶ月後には、ダブリンに遠征し、定評のあるワンダラーズと試合を行った。1876年4月にはコーククラブに圧勝した⁵²⁾。設立当初、周りにクラブが存在しないにも関わらず、バリントンのコネクションで多くの対外試合が行われていたようである⁵³⁾。マンスター⁵⁴⁾においてラグビーは、中産階級や上流階級に限定されていた。エリートの教育機関はこの地域におけるラグビーの普及に大きな役割を果たす。TCDの卒業生が教師として赴任した学校で、ラグビーが行われていた⁵⁵⁾。

リムリックFCのメンバーは、リムリック・プロテスタント・ヤング・メンズ協会、リーミーズ校

49) Ibid., p. 90

50) Ibid., p. 91

51) Ibid., p. 94

52) O'CALLAGHAN, Liam, *Rugby in Munster - A Social and Cultural History*-, Cork University Press, 2011, p. 26

53) Ibid., p. 75.

54) アイルランド島は北部アルスター、東部レンスター、西部コナート、南部マンスターの4地域に分類される。マンスターは、カウンティ・リムリック、カウンティ・コーク、カウンティ・クレア、カウンティ・ケリー、カウンティ・ティペラリー、カウンティ・ウォーターフォードの各州で構成される。

55) O' CALLAGHAN, op. cit., p. 67, 68

(Leamy's School)、リムリック・ローンテニス・アンド・アスレティッククラブなどのメンバーと重複していた。このように、クラブはジェントルマン・アマチュアの狭いコミュニティで形成された。また、地元のリムリック・ボートクラブとも密接な関係にあり、クラブ間でボート競技のエイトを行ったりした⁵⁶⁾。

バリントンは1877年に設立されたLAABCの活動に携わっている。クラブ史では、設立当初についての言及がなく、クラブが開いた最初の大会(Limerick Athletic Sports)の参加者にもバリントンの名は見つけられない⁵⁷⁾。訃報記事では、最初の会長だったと紹介され⁵⁸⁾、クラブが公開している最も古い1882年の年次総会でバリントンは副会長に選出されている⁵⁹⁾。また、1882年から1892年の間、副会長に選出されており、1893年から1907年には会長を務めている⁶⁰⁾。1892年のクラブの大会で行われた招待マイルレースヘカップを寄贈⁶¹⁾、1910年の4マイルチャンピオンシップヘカップを寄贈⁶²⁾するなど、バリントンはLAABCの運営に継続して携わっている。

バリントンは、ゴルフクラブが公式に結成される以前から、ゴルフに親しんでいたようである。かつて、多くの地主がそうであったように、自身の所有地で少数の友人たちとゴルフを行い、夜にはパーティを邸宅で開いた。リムリック地域で、ゴルフクラブが結成されたのは1891年になってからである。この年の12月11日にリムリック市で32人のジェントルマンが集まり、最初の会議が行われ、リムリック・ゴルフクラブが結成された。ここで、会長の選出、年会費の設定が行われ、女性(レディ)の入会も認められた。バリントンは、1894年に開かれたクラブの3回目の年次総会で委員に選出さ

れる。また彼は、1898年10月に自身の邸宅の近くでニューポート・ゴルフクラブ(Newport Golf Club)を設立した。リムリック・ゴルフクラブの活動は停滞していたが、1901年11月2日、クラブを復活させるための会議が行われ、バリントンがキャプテンに選出される。そして、翌年の年次総会で、会長に就任し、以降1926年まで続けた。会長を辞める際バリントンは、クラブの会長を続けたいがイングランドに移住したことから辞職する、とその理由を説明している。1927年からは終身パトロンとなる。また、バリントンはカップ⁶³⁾を寄贈して大会を行うなど、生涯、クラブとの関係を続けた⁶⁴⁾。

バリントンは、クリケットの選手ではなかったが、1879年、アイルランドの代表チームが初の海外遠征を行う際、商用で同行している⁶⁵⁾。また、イングランドに移った後、1931年3月10日に開催された地元のカードリッジ・クリケットクラブ(Curdrige Cricket Club)の年次総会に副会長として参加している⁶⁶⁾。

TCDを卒業してからも、バリントンは様々なスポーツに関わる。選手として、漕艇ではTCDのクラブでヘンリーへの出場やアメリカの国際大会への出場など、非常に意欲的に取り組んでいる。ボートはイングランドに移ってから、楽しみとしてプレーし続けていたようである。ゴルフも同様に、競技化が進む前から、娯楽としてプレーしていた。クラブが設立されてからは、クラブの運営に生涯、関わっている。地方のリムリックにおいて、フットボールクラブやアスレティッククラブの運営に携わるなど、近代スポーツがアイルランドの地方都市へ伝播、普及する過程で、バリントンの知識や経験、コネクションは、重要な要素だったといえよう。

56) Ibid., p. 75

57) *the Irish Examiner*, 1878年4月7日

58) *the Limerick Leader*, 1943年8月16日

59) LAABC公式ホームページ(www.limerickac.ie) 2015年8月17日閲覧

60) *the Irish Examiner*, 1893年6月15日、1894年6月7日、1895年6月6日、*the Freeman's Journal*, 1900年3月26日、*The Munster News and Limerick and Clare Advocate*, 1887年4月2日、*the Limerick Leader*, 1932年4月9日

61) *the Irish Examiner*, 1892年4月5日

VI おわりに

バリントンは、イングランドのラグビー校で学び、TCDで学生時代を過ごした。TCDでは、フットボールと漕艇に打ち込むとともに、アスレティッククラブの運営に携わる。特にフットボールクラブでは、3シーズンにわたりキャプテンを務め、それまで様々な形式で行われていたフットボールのルールを成文化し、ポジションの概念を導入するなどの改革を行った。漕艇では、ヘンリーに参加し、ヴィジターズカップで優勝するとともに、そこで行われていたエイトをアイルランドに導入している。TCD卒業後も、選手として漕艇を続け、ヘンリーで輝かしい成績を残し、アメリカでの国際試合に参加している。また、地元リムリックに戻ってからは、フットボールや漕艇、アスレックス、ゴルフのクラブを設立、その運営に携わり、近代スポーツがアイルランドの地方都市に普及する基礎を築いた。

このようにバリントンは、TCDで行われていたフットボールを、ラグビー校の形式を参照しながら、官僚化、合理化、専門化を行い、オリジナルのフットボールを作成するとともに、近代スポーツの概念を持ち込んだ。選手としては一つの競技に専念するのではなく、様々な競技に関わり、一線を退いた後も運営やカップを寄贈するなどの形でスポーツ活動に関わっている。アイルランドのエリート層はイングランドで行われていた近代スポーツをアイルランドに持ち込むとともに、クラブ運営においても、その知識や社会的階層のつながり、金銭面など近代スポーツの組織を地方で作る上で、重要な役割を果たしている。イングランドからアイルランドへの近代スポーツの流入に関して、鉄道の敷設

や用具の大量生産など社会的な要因のほか、バリントンのようなエリート層も一定の役割を果たす。

アイルランドにおけるスポーツは、ナショナリストと非ナショナリストの対立のコンテキストの中で述べられる。ラグビーやアイルランドのナショナルスポーツはそれ自体が社会階層を表象する。実際、バリントンのスポーツライフを検討する作業の中で、彼が様々なスポーツ活動に携わっているにも関わらず、ナショナルスポーツを統括するGAAとのつながりを示す記録は管見の限り見つからなかった。アイルランドで独立運動や社会運動が活発になる世紀転換期、GAAは政治運動との結びつきを強めるが、一方で、バリントンのようなエリート層はクラブや協会の設立といった近代スポーツのシステムを導入し、イングランドのスポーツをアイルランドに定着させていった。

【付記】

本研究はJSPS科研費25750291の助成を受けたものです。

62) *the Freeman's Journal*, 1910年5月14日

63) *the Irish Examiner*, 1938年4月28日

64) リムリックゴルフクラブ公式ホームページ (www.limerickgolfclub.ie) 2015年8月19日閲覧

65) レンスタークリケットユニオン公式ホームページ (www.cricketleinster.ie) 2016年3月18日閲覧

66) カードリッジ・クリケットクラブ公式ホームページ (www.curdridge-cc.co.uk) 2015年8月19日閲覧

Sporting Life of the Elite in Ireland at the Turn of the Century

A Focus on the Father of Irish Rugby,

Charles Burton Barrington (1848-1943)

Masayuki Enomoto

Charles Burton Barrington (1848-1943) came from a distinguished Anglo-Irish family with a seat at Glenstal in County Limerick. He was educated at Rugby School in England before entering Trinity College, Dublin in January 1867. He captained the Dublin University Football Club in 1867-68, 1868-69 and 1869-70, during which time he drew up the playing rules in 1868 like the football had been played in Rugby School. He was also formidable oarsman and a member of the Trinity College crews that won the Visitor's Cup at the Henley Royal Regatta in 1870, 1873 and 1874. He and his crews brought eights' rowing to Ireland from the Henley in 1870.

After graduating university, Barrington returned to his home in County Limerick and began to organise sports like rowing, football, athletics and golf. He was a member and patron of the Limerick Boat Club as well as one of the promoters of the Limerick Football Club founded in 1876. With Barrington's close link to Trinity, Limerick FC quickly established itself as a leading club. In addition, Barrington was a committee member of the Limerick Amateur Athletic and Bicycle Club, where he served as the club's first president, then as vice president from 1882 to 1892 and president again from 1893 to 1907. He also presented the cups to the winners of the race. Furthermore, he loved playing golf and was a member of the Limerick Golf Club and its president from

1902 to 1926. After moving to England, he became a Life Patron until his death in 1943. His connection with Limerick Golf Club spanned almost fifty years.

This study traces Barrington's sporting life. He is known for his major contribution in two disciplines in Irish sport – rugby football and rowing. Moreover, he is credited for bringing British modern sports to provinces in Ireland and establishing their presence.

